

信じる者の希望

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 出村, みや子 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24783

「信じる者の希望」

大学宗教学主任 出村 みや子

ローマの信徒への手紙、第八章一八節〜二五節

18 現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りないものとわたしは思います。19 被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。20 被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。21 つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。22 被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。23 被造物だけでなく、霊の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。24 わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。25 現に見ているものをだれがなお望むでしょうか。わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

キリスト教では信仰・希望・愛の三つを最も重要とみなしており（コリントの信徒への手紙一 一三章一三節）、キリスト教的生き方にとっては日々の実践において神の約束を信じて希望を失わず、互いに愛し合うことが大切にされています。しかし心を痛めるような事件が日々報道され、自分の思うように行かないことが多いストレス生活を送っている現代人にとっては、このことを実感することは難しいかもしれません。つい先日には十月の連合総研の勤労者短時間調査で、「今後一年間に失業する不安を感じる」という人の割合が二〇代で32・9%になり、過去最高になったことが広く報道されました。就職が厳しく、非正社員で働く割合も多い若者に雇用不安が広がっているとのことでした。そのような厳しい社会情勢の中を生きるわたしたちですが、今朝の大学礼拝では絶えず信じ、希望を持つべきことを告げる聖書のメッセージについてひと時と一緒に学びたいと思います。

今朝選んだ聖書の箇所は、この世の中の苦しみが人間だけではなく、この世のすべての存在に及んでいることを告げています。パウロは一九節で「被造物は虚無に服している」と述べ、二二節でも「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」と告げています。旧約聖書の創世記には、原初の人間であるアダムとエバが神の禁令を破って園の果実を食べたことから、人類に労働や出産の苦しみに加えて死が入ったことが記されており、また最初の兄弟殺しのエピソードを伝えるカインとアベルの物語には、アベルの殺害

によって流された血によって大地までもが呪われたことが告げられています。

このような人間観、世界観は実は聖書に限ったことではありません。ギリシア神話によく親しんでいる方なら、例えば古代ギリシアの有名なパンドラの物語にも同じような記述があることを思い起こすでしょう。意図せず災いを招くことを意味する慣用語として「パンドラの箱を開ける (open Pandora's box)」という表現がしばしば本やテレビなどで使われますが、その起源となった物語です。ヘシオドスが伝えるところによれば、パンドラとは古代ギリシアの主神ゼウスがこの世に最初に生み出した女性の名前であり、広辞苑ではこのパンドラについて、「ギリシア語で神々から「すべての賜物を与えられた女」の意。ギリシア神話に見える地上最初の女。天の火を盗んだプロメテウスを罰するためにゼウスがヘファイストスに造らせ、贈り物としてプロメテウスの弟エピメテウスに与えた」とあります。ゼウスは、人類に味方して火を盗んで人類に与えたプロメテウスを罰した上に、その弟エピメテウスと人類にも復讐をしたということですから、聖書の神とは異なり、古代ギリシアでは非常に人間的な性格を備えた神々が受け入れられていたことになりました。さらにパンドラの箱については、ゼウスが神々に命じて美しさや機織りの技術に加えて、限らない憧れと欺きの心を備えた女を粘土で作らせ、プロメテウスの弟エピメテウスに妻として与えた際に、あらゆる災いを封じ込めた甕を一緒に人間界に持たせてよこしたと語られています。西欧の長い歴史の中で、人類にはなぜ様々な災いや不幸があり、死の運命があるのかを説明する原因譚としてこの物

語が広く語り伝えられる中で、台所で水やオリブオイルを貯蔵しておく大きな甕から、いつの間にか女性が手にする小箱に変わって、「パンドラの箱」として広く流布するようになりました。パンドラがこれを絶対に開けてはならないという禁令があるにもかかわらず、中身が見たいという欲望をどうしても抑えきれずに甕の蓋をあけてしまったため、中に詰めてあった数々の災いや不幸が飛び出してしまいました。彼女が驚いて急いで蓋をしたために、中には希望だけが残ったという話です。希望を持つということは、聖書では信仰や愛と並んで最も重要な事柄とみなされていますが、古代ギリシアでは人類に対する罰として与えられた甕に詰めてあった数々の災いや不幸の一つですから、よいものとはみなされていなかったことがわかります。実際古代ギリシアの詩の中には、希望は当てにならないものの表現として「あだな空しい希望」という言葉がよく見られます。

パウロは一九節で「被造物は虚無に服していますが」と述べ、二二節でも「被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています」と告げています。このパウロの言葉をわたしたちが否応なしに痛感させられるのが、愛する者、親しい者との死別を経験した時です。愛する者の突然の死に接してしばし言葉を失った瞬間を経験したことが、学生の皆さんにも既にあるかもしれません。教員にとっては将来の希望を抱いて熱心に学んでいた学生が健康を損ね、亡くなってしまふ場合、本人の無念さやご家族の悲しみを思うと言葉が出ないのです。ちょうど一〇日ほど前の一月一日にキリスト教学科四年の郡山裕太君が、将来牧

師になるといふ夢を抱いたまま、病のために亡くなりました。彼が所属していた教会の牧師が葬儀の際に、その最後の時について詳しくお話し下さいましたが、いくつもの病と闘いながら教会員やご家族の祈りに支えられ、いつか元気になって人の痛みのおかたの牧師になるという希望をずっと持ち続けていたとうかがい、涙にくれていた参列者は、告別式場で読まれた聖書のみ言葉や讃美歌にせめてもの慰めを得ることができました。

普段わたしたちは全く意識していませんが、聖書は、人生がある意味ですべての希望を一瞬にして失わせるような出来事との戦いの場であることを告げています。しかしパウロは、そのような人生の中で信じる者には同時に確かな希望があるのだということを力強くわたしたちに伝えています。パウロは二〇節で「被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています」と述べており、それはいつか滅びから解放される救いの時が来るからだと告げています。また二二節以下でも人間のみならず、この世のすべてのものがうめき、苦しんでいるが、それはいつか「体が贖われることを待ち望む」いわば産みの苦しみであって、「わたしたちはこのような希望によって救われているのです」とはっきりわたしたちに告げています。聖書は最後の敵である死すらも超える復活の希望を抱くことが信じる者たちに許されていることを、イエス・キリストの十字架の出来事を通じてわたしたちに指し示しているのです。様々な出来事が待ち受ける社会にこれから船出する学生の皆さんには、ぜひ聖

書の伝える確かな希望のメッセージについて、心に深く覚えておいていただきたいと思います。